様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３３８０４
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１３０７９

研究課題名（和文）保育者の環境構成の支援ツールの開発――「保育環境のアフォーダンス事典」へ向けて

研究課題名（英文）Development of childcare environment design support tools : Toward a casebook of affordances in educational environment

研究代表者
細田　直哉（HOSODA, Naoya）

聖隷クリストファー大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：６０６２２３０５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、保育環境から子どもの行動と発達を支えている特徴＝アフォーダンスを抽出し、それらを分類・体系化することで、保育者の環境構成の実践をサポートする５つのツールを開発した。１）「遊びの発達過程」と「環境のアフォーダンス」の関係の説明図式、２）「場所のアフォーダンス」の説明図式、３）「環境構成」の原理の解明、４）年齢別の保育室の空間構成の原理の解明、５）「玩具のアフォーダンス」のカテゴリー分類。これらのツールを保育者の研修や一般の保育雑誌で紹介し普及に努めると共に、保育環境の改善の指導を行ない、理論的な根拠に基づいた環境の変化によって子どもの行動を変え、発達の支援ができることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究を通して開発した５つのツールを含む研究成果を一般の保育者が購読する保育雑誌で１年にわたり連載するとともに、全国・地方自治体・園内など様々なレベルの保育者の研修で積極的に紹介し普及に努めることで、保育者の環境構成の実践を科学的・理論的にサポートすることができた。また、保育環境の改善にアドバイザーとして関わる際、このツールを活用し、確かな根拠に基づき保育環境を変えることによって、子どもの姿の望ましい変化が導けることを示した。学術的には、認知心理学のアフォーダンス理論が実際の保育環境の分析・改善に有効であることを示し、アフォーダンス理論の保育・教育への応用に道を開いた。

研究成果の概要（英文）：This study developed the following five support tools for childcare environment design:(1)a explanatory diagram of the relationships between affordances of environment and the process of child development, (2) a explanatory diagram of affordances of places,(3) principles of childcare environment design,(4) principles of space design of childcare environment, (5) category of affordances of toys.These tools were used in action researches for the purpose of environment change.

研究分野：保育学、教育学、心理学

キーワード：保育環境　環境を通した教育　アフォーダンス　発達　玩具　遊具　教育環境　場所

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

「保育」とは、子どもが関わる環境を意図的に構成し、それを通して子どもの経験を方向づけ、発達を促す「環境を通した教育」である。しかし、その方法を理論的に根拠づけ、実践を導くことができる確かな理論は 21 世紀の今もまだ確立されてはいない。

「環境を通した教育」の理論化の難しさは、「保育環境」という「物理」と「子どもの心身の発達」という「心理」を整合的につなぐことが困難だからである。そこで、われわれは「物理／心理」を分離できない一体の現象として捉えた認知心理学の新たな単位＝「アフォーダンス」（主体の活動の中で知覚・利用されている環境のリソース）に着目し、それが保育実践の中で意図的に活用されている場面の収集から理論化を開始することにした。

２．研究の目的

本研究の目的は、「保育環境のアフォーダンス事典」の開発に向けた様々なツールの開発である。具体的には、以下の３つのステップで目的を達成する。(1)認知心理学の「アフォーダンス理論」の観点から保育者の環境構成の実践知を明らかにする。(2)園内研修等を通じてその実践知の実験的検証（アクション・リサーチ）を行う。(3)それらの成果をまとめて「保育環境のアフォーダンス事典」につながる様々なツールを開発する。

３．研究の方法

保育環境についての著作等があり、環境構成の実践知の言語化が可能な園を訪問し、(1)保育環境の構成の意図についてインタビューを行い、その環境における子どもたちの行動の動画データと比較する。(2)保育者の意図通りの行動が生じていた場合、それを支えている環境の特徴や構造を「保育環境のアフォーダンス」として抽出する。(3)抽出された「保育環境のアフォーダンス」を０～６歳の発達過程と関連づけて分類・整理する。(4)「保育環境のアフォーダンス」の有効性を検証するため、園内研修にアドバイザーとして関わっている園で、保育者から子どもの行動に関する悩みを聞き取り、その解決につながるアフォーダンスを環境に埋め込むアクション・リサーチを行う。(5)以上の研究成果を整理・体系化し、「アフォーダンス事典」の材料となる様々なツールを開発し、研修等で活用しつつ、その有効性を評価する。

４．研究成果

(1)「遊びの発達過程と保育環境の四重構造モデル」の開発：

「保育者へのインタビュー」、「子どもが発見・利用するアフォーダンス」、「０～６歳の発達過程」を関連づけて、「遊びの発達過程」と「保育環境の全体構造」との関係を図解した(図 1)。

保育環境は「生活／モノ／ヒト／コト」という四つの構成要素からなる場として把握できる。

まず「衣/食/住」の基本欲求に基づいた「生活」があらゆる発達の土台にある。この「生活」が安定すると、子どもの興味は次第に周囲の環境にひろがる。そこには「ヒト」と「モノ」があり、子どもは「ヒトとのかかわり」と「モノとのかかわり」を共にひろげながら、それと一体に自己のさまざまな能力を開花させていく。

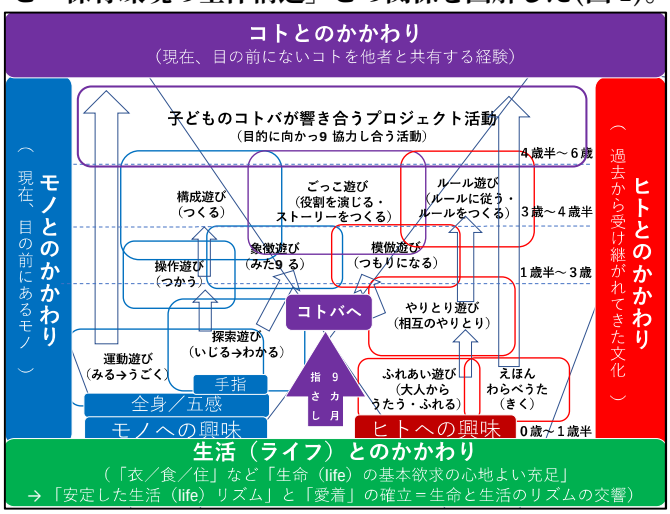

図 1　遊びの発達過程と保育環境の四重構造モデル

「ヒトとのかかわり」の発達を「遊びの発達」に沿って整理すると、①「ふれあい遊び」→②「やりとり遊び」→③「模倣遊び」→④「ルール遊び」という順序で進む。子どもの能力を軸にして捉え直すと、①「大人からはじめたかかわりに応答する段階」→②「子どもからもかかわりをはじめ、相互にやりとりする段階」→③「何かになったつもりで遊ぶ段階」→④「ルールにしたがい（→つくり）遊ぶ段階」という発達過程として整理できる。

他方、現在目の前に存在する「モノとのかかわり」の発達を大まかに整理すると、「全身」でモノにかかわる「粗大運動」の発達と、「手指」でモノにかかわる「微細運動」の発達に分けられる。モノの操作には「思考力」もかかわるため、この発達過程は認知発達も反映している。

この「モノとのかかわり」の発達過程は、①「いじる（→わかる）」→②「つかう」→③「みたてる」→④「つくる」という順序で進む。認知能力の発達を軸にして捉え直すと、①「モノを五感で探索し、多様な機能をわかる段階」→②「モノを特定の目的のために使う段階」→③「あるモノを他のモノに見立てて遊ぶ段階」→④「今ここにないものを想像し、モノを組み合わせてつくる段階」という発達過程として整理できる。

「ヒトとのかかわり」と「モノとのかかわり」の発達の流れは「９ヶ月／指さし」で重なり、それ以降は重なり合った部分が次第に大きくなる。これは「指さし」の力が「コトバ」の

力につながり、それ以降の発達過程において大きな役割を果たすことを示している。「コトバ」の機能は、アフォーダンス理論に基づけば以下のように定義可能である。環境のアフォーダンスが実現された状態・出来事を「コト」と定義すると、「コトバ」とはそれを指し示す記号として定義できる。環境のアフォーダンスは無限であるため、ヒトと共に活動する際には「コトバ」によってどのアフォーダンスに注目するかを相互調整する必要があるためである。

「生活/ヒト/モノ/コト」とのかかわりを促進するためには「その時に伸びる力が繰り返し発揮され、安定したスキルの獲得を支えるアフォーダンス」と、「次の発達に向かって伸びていく力を引き出す挑戦的なアフォーダンス」の両方を環境の中に構成する必要がある。

図中ではキーワードと矢印と領域の色分けによって、発達を支えるアフォーダンスと発達の方向性とその重なり合いを示している。この図をタテ/ヨコに見ながら環境構成をすることで、保育者は子どもの活動のバリエーションと発達過程の全体を見通した環境構成ができるようになり、子どもの全人的な発達を保障することができるようになるだろう。

(2)「場所のアフォーダンス」の構成原理の解明と図解：

保育環境内の大きな「モノ」はその配置によって多様な「場所」を構成し、それぞれの「場所」には異なるアフォーダンスが生まれる。この多様な「場所のアフォーダンス」を原理的に考察し、それが「モノ」の「水平な面/垂直な面」のアフォーダンスの組み合わせから構成されていることを解明し、その原理を図解した（図２）。

①「水平な面」には「移動／安定」という正反対のアフォーダンスがある。モノのない環境では、子どもは「安定」ではなく「移動」のアフォーダンスを利用する傾向がある。このような環境で「安定する場所」は「壁と壁」または「壁と床」が出会う「隅」にわずかに見られる。

②その「水平な面」の上に「絨毯・マット・畳・布」のような「柔らかい面」を敷くことで子どもは「硬い面／柔らかい面」の対比を知覚し、「柔らかい面」の上では「移動」よりも「安定」のアフォーダンスを利用するようになる。

面のカテゴリー	基本のアフォーダンス	具体物の例（△は水平/垂直の複合）	「場所」の構成過程の例
「水平な面」	「移動」 「安定」	◎床 ◎敷物（畳・絨毯・マット・布） ◎机（△） ◎椅子（△） ◎棚（△）	① ② ③ ④
「垂直な面」	「移動の停止」 「情報の呈示」 「情報の遮蔽」	◎壁 ◎棚（△） ◎つい立て ◎掛物（カーテン・布） ◎扉 ◎窓 ◎机（△） ◎椅子（△）	

図 2　「場所のアフォーダンス」の構成原理

③「柔らかい面」が敷かれた場所を「棚」や「つい立て」などの「垂直な面」で囲むことによって、小さな「囲まれた場所」が生まれ、余分な「視覚情報」も遮蔽されるため、そこはさらに「安定する場所」になる。

④一方、「手の活動」が「安定する場所」を構成するためには、「手の高さ」にある「水平な面＝机」が必要である。「手の活動」が「足の高さ」にある「水平な面＝床」で行われる場合、そこには「(足の）移動」のアフォーダンスもあるため、「手の活動」と干渉し合い、「安定」できないからである。「机」とは「手の活動」が行われる「手の床」として定義できる。

このように、保育環境内の「場所のアフォーダンス」は「水平な面／垂直な面」の「基本アフォーダンス」の組み合わせから論理的に構成されるが、その構成原理は以下のように一般的に表現できる：「水平な面」の「移動のアフォーダンス」の情報を「垂直な面」の「移動の停止のアフォーダンス」の情報で遮蔽することによって、「安定する場所」が構成される。

(3) 保育者の「環境構成」の意味の原理的解明と図解：

保育者の「環境構成」とは、子どもと「ヒト/モノ/コト」との「出会いとかかわりの場」のデザインとして定義できる。その「出会いとかかわり」は「①出会い→②安定→③集中→④発展」のように４段階で次第に広がり、深まる中で子どもの発達を促進している。

その「かかわりの広がり・深まり」が生じる環境を構成するため、保育者がいかに環境の「水平な面／垂直な面」のアフォーダンスを活用しているのかを図解した（図３）。

①最も単純な「出会いの場」は、「床（水平な面)」の上に「モノ」を置くことで生まれる。この「出会いの場所」は「移動のアフォーダンス」の中央にあるため、「モノ」へのアクセスは容易だが、「安定」は難しい。

②「安定の場」を生み出すには、「移動のアフォーダンス」との差異をつくる必要がある。たとえば、「床」の上にそれとは異質な「水平な面」（例：「敷物」や「机」）を置き、知覚的な対比によって「安定」を強調することである。しかし、こうした場所は全方位に「開かれている」ため、アクセスが集中したり、逆に注意が拡散したりして「集中」は難しい。

③「集中の場」を生み出すためには、そこをある程度「閉じる」必要がある。「垂直な面」で囲むことでその場所を「閉じる」ことができ、「集中の場」になる。しかし、これだけでは「発展」は難しい。

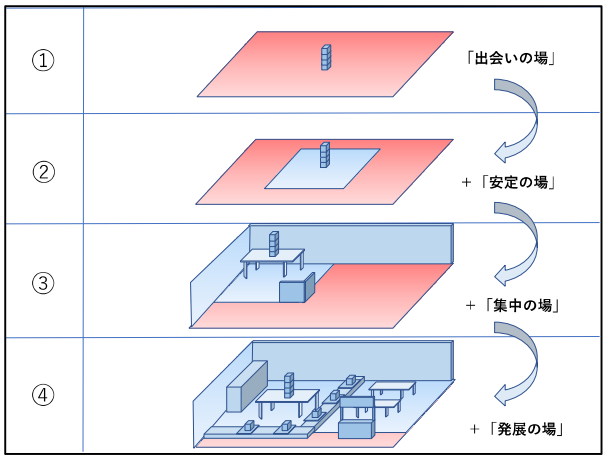

図 3　環境構成の原理

④「発展の場」を生み出すためには、逆にその場所をある程度「開く」必要がある。その場所の内部あるいは隣接した場所に他の「モノ/ヒト/コト」を位置づけることで新たな「出会いの場所」を生み出し、新たな活動への飛躍が生じる可能性をつくりだすことが必要である。

このように保育者は子どもの発達を促進するため、「水平な面/垂直な面」のアフォーダンスを組み合わせ、「①出会い→②安定→③集中→④発展」の４段階が自然に展開する場を構成している。しかも「④発展」とは新たな「①出会い」であるため、この４段階は「①出会い→②安定→③集中→④発展（＝①出会い→…）」のように高次化しつつ無限にループしながら進行する過程である。ゆえに、保育者は子どもの活動の展開過程に応じて、そのような漸次的な高次化の過程が進行するようにその都度適切な「環境の再構成」を行う必要がある。

（４）年齢別の保育室の「空間構成の論理」の解明

年齢別の保育室の「空間構成の論理」を解明し、その原理的なモデルを図解した（図４）。

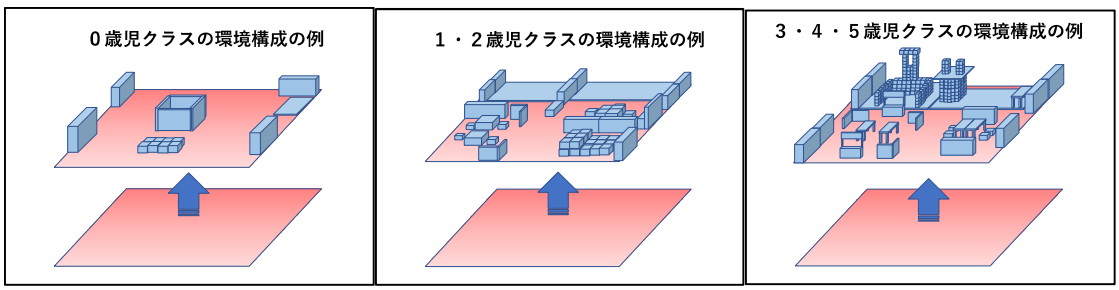

図 4　年齢別のクラスの環境構成の例

０歳児クラス：０歳児クラスの空間構成は「回遊性」に特徴がある。最初は自分で移動できない子どもが１年間に「寝返り」→「旋回」→「ずりばい」→「はいはい」→「つかまり立ち」→「つたい歩き」→「自立歩行」へと移動の仕方を発達させる。この過程を支えるために多様な発達段階の子どもが「移動のアフォーダンス」につねにアクセスできる環境が必要だからである。そのため、部屋の中央に「ベビーサークル」を置き、その周囲を無限に回遊できるようにしている。また、中央の「ベビーサークル」は部屋の空間を四方にゆるやかに分割し、０歳児の発達に必要なさまざまな経験ができる「複数の場所」も同時に構成している。人の出入りの多い入り口近くは「大型積木」等を置くことで移動を伴う「動的な遊び」ができる場所を構成し、反対側の２つの隅には「棚」や「柔らかいマット」を置き、人形や手を使う玩具を配置することで「静的な遊び」が安定して行える場所を構成している。

１・２歳児クラス：１・２歳児クラスの空間構成は「安定性」に特徴がある。図では「棚」を部屋の「壁」に対して垂直に置くことで部屋をタテ/ヨコに分割し、３つの「場所」を構成している。ヨコに並んだ２つの「小さな場所」には「柔らかいマット」が敷かれ、長時間集中して遊び込める「安定・集中の場所」になっている。この年齢の子どもは移動から解放された「手」を使って「モノとのかかわり」をひろげること、発達しつつある「コトバ」を使って「モノとのかかわり/ヒトとのかかわり」をつなげて行為することなどが発達の中心になるため、少人数でじっくり手を使いながら遊び込める「小さな安定した場所」を構成することが必要だからである。また、人の出入りが多い入り口付近の場所に大型の「牛乳パック積木」などを置くことで、子ど

もの発達に応じた動きができる「運動遊び」の場所も確保している。大型の「牛乳パック積木」を選んだのは、その時の興味関心に応じて自在に形を変えられ、「家」や「自動車」などを作り、「見立て・つもり遊び」から「ごっこ遊び」へと展開していくことなどもできるからである。

３４５歳児クラス：３４５歳児クラスの空間構成は「可変性」に特徴がある。この年齢では、子どもたち自身がその時の遊びに合わせて、みんなで話し合いながら、自由に空間を分割できるように、子どもの力で動かせる「つい立て」や「テーブル」などが多数用意されている。ベースとなる「安定の場所」を拠点としながら、その外に広がる空間に遊びを自由にひろげて、まったく新しい空間を創造できる「可変性」を確保しておくことがこの年齢には必要である。なぜなら、この時期の子どもたちはこれまでの経験をもとにしながら、何もない空間の中にも「こんな場所をつくってみたい」というイメージをもつことができ、お互いのイメージをコトバによって語り合いながら、「プロジェクト活動」を進めていくことができるからである。そのため、「完全に定義づけられていない空間」と「自分たちで自由に動かせるモノ」が保障されていることがこの時期の子どもたちの発達を促進する環境としてふさわしい。

(5)「玩具・遊具のアフォーダンス」の３つのカテゴリーの発見

０１２歳児クラスの室内の玩具・遊具をすべて写真データに変換し、それが「どのような行動・発達を支えているか」という観点から大きく分類し、以下の３つのアフォーダンスのカテゴリーを発見した。

①「体」の発達を支えるアフォーダンス：「うごく」ためのモノ
（＝「環境全体とかかわる姿勢や動作」の発達を支えるアフォーダンス）
②「頭―手」の発達を支えるアフォーダンス：「いじる／つかう／つくる」ためのモノ
（＝「モノとかかわる力」の発達を支えるアフォーダンス）
③「心」の発達を支えるアフォーダンス：「つもりになる／おもいやる」ためのモノ
（＝「ヒトとかかわる力」の発達を支えるアフォーダンス）

この３つのカテゴリーは、他の動物とは異なる「人間らしさ」として挙げられる特徴（①二足歩行、②道具使用、③共感性・言語使用）に正確に対応している。室内の「玩具・遊具」の分類から、「人間らしさ」の３つの特徴と対応したカテゴリーが発見されたという事実は、保育環境が子どもたちの「人間らしさ」の発達を保障する環境であることを示している。

(6)保育者の研修におけるツールの普及とアクション・リサーチにおける活用

以上の研究の進行と同時並行的に(1)～(5)の研究成果を全国、地方自治体、園内など様々なレベルの保育者の研修会において紹介し、保育者の環境構成の実践を科学的に支えるツールの普及に努めてきた。また、研究代表者が保育環境のアドバイザーとして関わる園において、保育者の保育に関する悩み（子どもの行動に関する悩み）を聞き取り、それらの解決のためのアクション・リサーチにおいて以上の研究成果を活用した。その結果、子どもの行動が大きく変化した（「かみつきやトラブルが減った」「集中して長い時間遊べるようになった」）だけでなく、保育者の保育の仕方も変化した(「大きな声で話さなくなった」「指示や禁止の言葉が少なくなった」)。

これらの変化についてはまだ十分なデータが得られていないため、詳細な量的・質的分析は現時点で完了していないが、保育者が語る実感はこの間の変化の大きさを物語っている。

１歳児から子どもたちの主体性を引き出せるように環境を変え、２歳児でもそれを継続したクラスは３歳児になった現在、「これまでの３歳児とはまったく違う姿」を見せているという。たとえば、「指示がなくても自分たちで見通しをもって行動でき」、「自分たちで主体的に遊ぶことができる」。そのクラスの様子を見学に訪れた他園の保育者が、自分の園の「同年齢の子どもたちとの違い」に驚き、自園でもそのような環境の改善をしたいと考えたほどの変化であった。

このエピソードは「環境構成の変化による子どもの行動の変化」の事実に直面することが、どのような理論よりも強烈に、保育者の保育観や保育実践を変える力をもつことを示している。子どもの「問題行動」の原因を「子どもの内面」だけに求めていた保育者が、目の前で変わっていく子どもの姿に直面することで、子どもの発達を形づくる「環境の力」にみずから目を向けるようになるのである。「保育環境のアフォーダンス事典」の素材となる多様な「ツール」を実際の園環境に活用し、環境を改善していくことは、その有効性を検証する効果をもつばかりでなく、子どもの姿の変化という事実を通して、保育者の認識を変え、実践を変えていく効果をもつのである。

現在は、以上の研究成果およびその後の研究成果を総合して、一般の保育者が購読する保育雑誌に１年にわたって連載し、それらをまとめて「保育環境のアフォーダンス事典」として出版する計画を編集者と進めている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計16件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 細田直哉	４．巻 155号
２．論文標題 保育における環境と心の育ち・身体性・遊び	５．発行年 2018年
３．雑誌名 発達	６．最初と最後の頁 22-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 細田直哉	４．巻 第８巻
２．論文標題 環境と希望	５．発行年 2017年
３．雑誌名 保育ナビ	６．最初と最後の頁 64-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 細田直哉	４．巻 第８巻
２．論文標題 アフォーダンスという希望	５．発行年 2017年
３．雑誌名 保育ナビ	６．最初と最後の頁 64-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 細田直哉，佐々木晃	４．巻 161
２．論文標題 遊誘財とは何か：子どもを遊びに誘う保育環境	５．発行年 2017年
３．雑誌名 園と家庭をむすぶ　げんき	６．最初と最後の頁 2-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 細田直哉	4．巻 第8巻
2．論文標題 アフォーダンスの視点でみる環境構成	5．発行年 2017年
3．雑誌名 保育ナビ	6．最初と最後の頁 64-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 細田直哉	4．巻 第8巻
2．論文標題 片づけが身につく保育環境	5．発行年 2017年
3．雑誌名 保育ナビ	6．最初と最後の頁 64-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 細田直哉	4．巻 第8巻
2．論文標題 園の時間・空間のデザイン	5．発行年 2017年
3．雑誌名 保育ナビ	6．最初と最後の頁 64-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 細田直哉	4．巻 第8巻
2．論文標題 「指示」や「禁止」のいらない環境	5．発行年 2017年
3．雑誌名 保育ナビ	6．最初と最後の頁 64-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 細田直哉	４．巻 第８巻
２．論文標題 遊びを生み出す環境の３つの要素	５．発行年 2017年
３．雑誌名 保育ナビ	６．最初と最後の頁 64-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 細田直哉	４．巻 第８巻
２．論文標題 子どもの「夢中」を支える環境	５．発行年 2017年
３．雑誌名 保育ナビ	６．最初と最後の頁 64-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 細田直哉	４．巻 第８巻
２．論文標題 玩具のアフォーダンス	５．発行年 2017年
３．雑誌名 保育ナビ	６．最初と最後の頁 64-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 細田直哉	４．巻 第８巻
２．論文標題 出会いと対話を支える環境のアフォーダンス	５．発行年 2018年
３．雑誌名 保育ナビ	６．最初と最後の頁 64-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 細田直哉	4．巻 第８巻
2．論文標題 環境を変えると遊びが変わる	5．発行年 2018年
3．雑誌名 保育ナビ	6．最初と最後の頁 64-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 細田直哉	4．巻 第８巻
2．論文標題 保育の希望・未来への翼	5．発行年 2018年
3．雑誌名 保育ナビ	6．最初と最後の頁 64-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 細田直哉	4．巻 159号
2．論文標題 一人ひとりを大切にする環境：目に見えないことを目に見えるものにする	5．発行年 2017年
3．雑誌名 園と家庭をむすぶ　げ・ん・き	6．最初と最後の頁 2－19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 細田直哉，吉本和子	4．巻 173号
2．論文標題 「遊びの援助」とは何か	5．発行年 2019年
3．雑誌名 園と家庭をむすぶ　げ・ん・き	6．最初と最後の頁 2-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　3件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 細田直哉
２．発表標題 「環境を通した教育」とは何か：保育環境における認識と行動の発達を支えるアフォーダンスとその効果
３．学会等名 日本生態心理学会第7回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 細田直哉
２．発表標題 赤ちゃんは保育環境から何を学ぶのか
３．学会等名 第3回だっことおんぶの学術研究集会：Academic Babywearing Conference 2018 in Tokyo
４．発表年 2018年

１．発表者名 細田直哉
２．発表標題 保育環境のアフォーダンス：発達のアフォーダンス事典の開発に向けて
３．学会等名 日本発達心理学会第30回大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 細田直哉
２．発表標題 「保育環境のアフォーダンス事典」の開発へ向けて
３．学会等名 東京大学発達保育実践政策学セミナー（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 細田直哉
２．発表標題 「発達のアフォーダンス事典」の開発へ向けて
３．学会等名 日本心理学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 細田直哉
２．発表標題 保育室の室内環境の構造とその効果
３．学会等名 日本発達心理学会第28回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 細田直哉
２．発表標題 子どもと環境をどのようにつなぐのか：生態心理学（アフォーダンス）の視点から
３．学会等名 日本子ども学会学術集会第17回子ども学会議（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計3件

１．著者名 佐治 晴夫、勝間田 明子、細田 直哉	４．発行年 2018年
２．出版社 みらい	５．総ページ数 120
３．書名 あそんでまなぶ　わたしとせかいー子どもの育ちと環境のひみつ	

１．著者名 染谷昌義、細田直哉、野中哲士、佐々木正人	４．発行年 2018年
２．出版社 金子書房	５．総ページ数 232
３．書名 身体とアフォーダンス	

１．著者名 秋田喜代美、細田直哉　他	４．発行年 2019年
２．出版社 中央法規出版	５．総ページ数 435
３．書名 保育学用語辞典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考